

新潮文庫

人物日本史 昭和

—時代小説大全集 6—

新潮社 編



新潮社

じんぶつ にほん し しょうわ
人物日本史 昭和
—時代小説大全集6—

新潮文庫

し - 22 - 15



平成三年九月二十五日 発行

編者

新^{しん}潮^{ちよう}社^{しゃ}
監修 縄田一男

発行者

佐藤 亮一

発行所

株式
会社
新
潮
社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)三二六六―五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Kazuo Nawata & Shinchosha 1991 Printed in Japan

ISBN4-10-120815-8 C0193

江苏工业学院图书馆

新潮文庫

人物日本史 昭和
藏書章

—時代小説大全集 6—

新潮社編



新潮社版

目次

軍人1——戦いの始まり

私抄“二・二六事件” ●北 一輝 村上一郎 九

山本五十六かくて死す 豊田 穰 四

軍人2——戦いの終わり

左利きの独裁者——東條英機の悲劇 有馬頼義 七

幻の虎 ●山下奉文 城山三郎 一三

終わりと始まりの儀式 ●マッカーサー 保阪正康 一七

川島芳子 田辺聖子 一七

泥炭層 ●白鳥一雄 松本清張 二九

政治家

近衛文麿 尾崎秀樹 二八

吉田 茂……………小林秀雄 三七

越山田中角栄……………佐木隆三 三三

文化・芸術・スポーツ

菊池と芥川の奇妙な友情ものがたり……………村松梢風 三六

フジヤマノトビウオ古橋広之進……………井出孫六 三五

黒澤 明……………梶山季之 四〇

美空ひばり……………マキノ雅裕 四三

力道山刺さる……………加太こうじ 四五

創意の人●川端康成……………山口 瞳 五一

小説 長島茂雄……………五味康祐 四五

時代小説大全集 6

人物日本史 昭和

軍人 1 — 戦いの始まり

私抄^{ししやう}

“二

・

二六

事件^{じけん}

”



北^{きた}

一輝^{いつき}

村上^{むらかみ}
一^{いち}
郎^{ろう}

陸軍内部の皇道派と統制派の対立から端を発し、遂に皇道派の青年将校が齋藤内相、高橋蔵相らを殺害、永田町一帯を占拠したいわゆる二・二六事件は、単なる派閥抗争に止まらず、以後、軍部独裁が進み、日本が全面戦争に突入する契機となった。

北一輝は、幸徳秋水、堺利彦らとも交遊があり、中国革命同盟会に参加し、かの地へ渡るも、中国革命に絶望し、反革命的立場を明らかにし、大正八年の「日本改造法案大綱」執筆を経て、老荘会等に参加。また西田税、村中孝次ら国家社会主義者を通じ陸軍青年将校と結びつき、彼らのカリスマ的存在として二・二六事件の精神的バックボーンとなっていた。後、同事件の指導者とみなされて、西田税とともに銃殺されている。

この作品は、浪漫的情熱をもって独自の北一輝研究を行った村上一郎の渾身の力作である。

荊軻就車而去。終已不顧。

（『史記』刺客列伝）

夢のように凍えきつたテロル
を聴いた黄昏 白い葉裏に翻
る睦言に 殺意をこめて おそ
らくはひとつの錯誤 屹立する
唇に 俺は手向けた この世の
ありとあらゆる美学を
………

（阿久根靖夫『わが幻の……』第一聯）

幼少年の日の五・一五体験、二・二六体験を憶いつつ、わたしはここにひとつの詩のごく部分だけを引いておく。

五・一五事件も二・二六事件も、わたしには身近かであった。

なぜ身近かであったかという、その理由は三つある。一つは、親戚にあたるある人物が、その二つの事件の「被害」をうけた内閣の末に列していたことである。二つは、わたしが剣道に通

い、氏原陸軍少佐らの軍人に文と武を学んでいた宇都宮はなによりも“軍都”であったということだ。そして第三には、わたしが、いまの言葉でいうならエモーショナルに育てられまた自ら育ったからである。その上、わたしはいつか海軍に入ること決めていた。

ここに非常にフラグメンテ風な手抄を書きとどめておく。耳に、一九六〇年代の去り、歴史の暦の新しい一葉がひるがえるかそけき紙のすべりを聴きながら――。

*

「日本国 辺見八郎太」というペンネームで、一九六八年秋、少部数プリントされた『日本共和国宣言大綱』とその附属文書のごとき『日本共和国宣言大綱のための嘔吐』というガリ版パンフレットがある。後者は、前者を書きつぐうちにこみ上げるように生れた短歌の集であり前者よりも早く一九六八年二月、「れい子」という女性に献^{ささ}げる形でプリントされた。

これは伊^い予^よの松山においてなされた小さいパンフ活動であるが、おそらくわたしは日本中に無数のといってよいくらい多くの似たような活動・行為があり、その氷山の一端として、『日本共和国宣言大綱』がわたしの目にとまったのであろうと思われる。

ちなみにこの『大綱』は、どんなジャーナリズムにも贈られず、ただ中共の北京放送局^{ペキン}にのみ送られたというから、筆者「辺見八郎太」はいわゆる「中国派」なのであろうか。そう思っで見るとこの『大綱』のいたるところに、毛沢東がもっているような農本的な匂^{にお}いがふんぷんして、それと日本の農本ファシズムの運動の一部を追認するかのような言辞とが相結んでわたしに看^み取られる。

『大綱』は明らかに北一輝の『改造法案』の様式を模してつくられている。緒言は、

「ただひとつ残されしもの——それは革命」

という端的な一行にはじまり、

「天皇並びに天皇制、それに蟬集する奴輩、政治は商估なりと瀆職、背任留る所を知らざる政治家、その政治屋を傀儡となし利潤追求に狂奔する財閥、支援する官僚、大地主、中小の資本家、これに阿諛追従し、はいえなの如く残肉をあさり続ける大学教授、ジャーナリスト、詩人、文学者、音楽家、美術家、等々、偽文化人の群れ。

断つべし、

悲歌慷慨遂に一髪だに動かす能わず。

蹶起すべし、

秋ぞ今」

といった調子の高いことばがつづられている。

本文は「第一 中央政治基本」からはじまり、その冒頭には、

「日本共和国ハ日本人民ノモノナリ／人民ヒトリヒトリノモノナリ／ヒトリヒトリ、自ラヲ地上最高ノ存在ト思イ定メテソノ生ヲ全ウセザルベカラズ／日本共和国中央委員政治正以下ハ人民ヒトリヒトリノ生ヲ全ウセシメルタメニ在リ」

と記されている。政治正とは、日本共和国を代表する者であり、「当分の間」、五権（三権分立でなく五権である）の上にあつて独裁する、日本共和国の超越的権力者である（しかも「人民ヒトリヒトリ」があくまで共和国の主体である）。

天皇制はむろん廃止される。が、その註に、「昭和天皇に許すべからざる三虐あり」としているところが注目される。

「一虐——三・一五、四・一八事件(ママ)に関われる憂国の志士達を逮捕し拷問し処刑したること。二虐——二・二六事件蹶起の青年将校をはじめ、純粹無比なる烈士・国士達を死刑に処したること。三虐——自らを現人神(あらひとがみ)といつわり三百六十一万九百二十一人の日本人を雀躍死(じゃくやく)に赴かせしこと」

「辺見八郎太」なる人は死刑にはつよく反対なので、この三虐に加うるに三悪をかさねた昭和天皇も、歴代首相以下も、死刑にはされない。その代り、日本列島周辺の無人島（その名を一々列挙してある）へ、ナベ一個とか米・麦のタネ等一定のものを与えられて流刑され、自然死を遂げしめられるのである。

それはそれとして、右の三虐に、天皇が二・二六事件の将校や北一輝らを死刑にした事実があげられているのでも判る(わか)ように、この「共和国」主義者、共産主義革命者は、二・二六事件を「反革命」とは見ていない。

人民に「反逆権」ありと規定し、「叛逆ナキ所、進歩ナシ。日本共和国人民、胸裡、熾烈(シレッツ)ノ焰(ホノ)ヲカカグベシ」云々(うんぐん)というところに補註があり、二・二六事件について、左のごとく詳述してある。

「二・二六事件をもつて右翼尊王論者の挙兵と考ふるは誤謬(ごびゅう)なり。国家社会主義者と断定するも浅見たるを免れず。彼等の心中、右翼も左翼もなきなり。又、終始、天皇絶対なりしが如く思(おも)うも亦、誤解(また)なり。

処刑されし青年将校等、銃弾を全身に浴びしとき、もの狂ほしき憤怒こみあげ、天皇を憎悪したるゆえなり。栗林中尉の絶叫にみる、磯部大尉の遺言にみる、こらに黙々たるゆえにこそ一層熾烈なる憎悪を抱きたらむ、安藤大尉の、中島少尉の林少尉等の胸裡をみる、皇居に向ひて腹切りし河野寿大尉の胸中も結局同じからめ。北一輝も亦しかり。刑場、西田税にさそはれて、彼、『天皇陛下万歳』を自然に拒み、ただ微笑みて死せり。『日本は重大なる時期を迎へん』と予言して。重大なる時期とは天皇制絶滅の危機を指す。由来、彼等その企図の第一歩より誤まてり。現人神天皇にたよりて天皇制を打倒せんとする矛盾これなり。しかも天皇その人の無節操、無能力なるにおいておや。北ほどの人傑にして免がれ得ざりしこの陷穽——おそるべきは教育・社会風潮のしからしむる所なり。幕末・明治・大正と日本を支配せし藩閥政府要人の非凡なる政治的才腕のしからしむる所なり。とまれ、二・二六蹶起青年将校達は千九百三十年前後の国民の貧困見るに忍びず、天皇を家父長とする理想国家——空想的社会主義者として出発し、天皇を人として憎悪し、天皇制を否定する古典的無政府主義者として終点に達せり。最初より破るべかりしなり。敗るるも可、人民のために生命を捧ぐるは潔きことなり。事を起すに際して塵劫も私心なかりし彼等、日本史上唯一の、いな世界史上稀有の純粹無比なる魂——我等、日本革命党員の夢寐に忘るべからざるものなり」（仮名づかい原文のまま）

かくて、「共和国」の反逆権を認める「辺見八郎太」にとつては、二・二六事件の将校や北一輝たちは、輝かしい世界史的な反逆の先駆者として受けとられたのである。

『宣言大綱』の附属文書として前にあげた歌集『嘔吐』においても、二・二六事件を賛仰し、将校たちの死をいたむ歌がいくつか見られる。歌としてけっして上手なものではないが、三、四を